

會學濟經學大國帝都京

# 經 濟 叢 論

號三第 卷九十四第

月九年四十和昭

## 論 叢

新利子論序說

文學博士 高田保馬

英國及び獨逸の所得稅

經濟學博士 汐見三郎

## 時 論

現代日本の革新

經濟學博士 石川興二

世界新秩序の建設

經濟學博士 柴田敬

## 研 究

史記平準書に見はれたる經濟思想

經濟學士 穗積文雄

府縣財政制度の成立

經濟學士 藤田武夫

經營比較の形態について

經濟學士 岡部利良

## 說 苑

原料封鎖に於ける獨逸の經驗

經濟學士 大塚一朗

「ドレツ」農業經濟學と農村社會學

經濟學士 山崎武雄

## 附 錄

彙 報

外國雜誌論題

(禁轉載)

# 經營比較の形態について

——經營比較論者の見解とその批判——

岡部 利良

一

經營分析論或ひは經營比較論に於いては、比較方法の研究が一箇の重要な問題をなしてゐる。經營分析に於いては一般に直接分析の對象とされる企業の特、定、時、(一定の時點及び一定の時間、例へば一營業年度と云ふ如きである)の収益性及び安全性の良否を判斷することが必要であるが、そのためにはかゝる収益性及び安全性の相對的位地を明かにしなければならぬ。良否とは相對的なものだからである。而してこの相對的位地は一定の比較を行ふことによつて明かにされるのであり、従つてこゝに、企業を如何に比較すべきかと云ふ比較方法の問題が生ずる。この小論に於ける企業の比較形態の問題は、かゝる比較方法に關する一部の問題である。

經營分析或ひは經營比較に於ける企業の比較は、經營(經營經濟)事象に關する一定の數量的記録即ち經營數値<sup>1)</sup>或ひはこの經營數値に基づいて計算された經營計算値<sup>2)</sup>によつて行はれるので、比較形態としてこゝに問題となるのは自らかゝる數値の比較形態である。即ちこれらの數値に即して云へば、この場合問題は、直接分析の對象たる企業の特、定、時、における數値(經營數値或ひは經營計算値)を、それ以外の他の比較の對象となるべき如何なる數値と關係せしめて比較するかと言ふことであり、<sup>3)</sup>こゝに言ふ比較形態とは、この關係のせしめ方によつて生ずる種

- 1) 經營(經營經濟)事象を集團として數量的に把握・表現せる數値。一般にはこれは單に經營事象に關する數値と考へられてゐる。
- 2) これは比率及び代表値(平均値)の如きである。蜷川博士、統計利用に於ける基本問題、99頁參照。
- 3) この場合、一特定時内部に於ける數値の關係せしめ方は、いま一應問題とし

々の比較の型(型の分類から云へば比較の種類)を意味する。而して問題の要點は、如何なる比較形態が存在するかを一定の基準の下に分類し、且つ分類された各個の形態の性質を明かにすることであらう。これらの點に關する私の見解は、不十分ながら先きの小論で一應述べた所である。<sup>4)</sup>

かゝる比較形態の問題は、既に從來から經營分析論(或ひは貸借對照表分析論)に於いて取扱はれて來た所であるが、其後所謂經營比較論に於いて更により發展を見つゝある。それは主として獨逸の學者によつて行はれて居り、それ〴〵種々の規定の下にこの問題が取扱はれてゐる。例へば經營比較の可能性(Weymann)、經營比較の種類(Schmitter)、經營比較に於ける比較方法(Maack)、貸借對照表の分析的研究の可能性(Leher)等々と言ふ如きである。<sup>5)</sup>もつとも各論者が論じてゐる問題の範圍は必ずしも等しくはないし、またこれらの問題に於いて私の言ふ比較形態のみが取扱はれてゐるわけではない。或ひは問題を取扱ふ角度も一樣ではない。けれども何れに於いてもそこには企業の比較形態に關する問題が多かれ少なかれ取上げられて居り、更に論者の規定の如何に拘らず、内容的には多分に同じやうな方向の問題が展開されてゐる。それらは比較の型に着目して見るとき、所謂經營(經營經濟)比較の形態の問題として取扱ふことが出来るであらう。

しかしながらこれらの研究に於いて問題は充分解決されてゐるであらうか。なほ吟味さるべき餘地が少なくないやうに思はれる。それでは從來具體的に如何なる比較形態が如何に問題とされてゐるか。こゝに所謂經營比較論に關する代表的な論著を基礎として、從來のこの問題の取扱ひ方を概観すると共にそれ〴〵若干の批判を試み、以つて問題の所在を更に幾分でも明かならしめたいと思ふ。

ない。このことは特に注意を要する。また以下に企業の比較と言ふも、それは具體的には常に一定の數値の比較を行ふことを意味する。この點一々斷らないけれども、こゝに於ける問題の性質上自明のことである。

4) 拙稿、經營分析における比較の意義と形態、經濟論叢第48卷第2號(昭和14年2月)。

種々の見解のうち、先づあげられるのは、經營比較を二つに區別する見解である。その代表的な論者としては、經營比較論に於ける先驅的な研究者の一人であるシュマーレンバツハをあげることが出来るだらう。

シュマーレンバツハは、經營比較の目的を經營（企業）の經濟性を測定することにありと規定し、これが比較の性質上、經營比較を時間比較（Zeitvergleich）と經營比較（Betriebsvergleich）との二種に分かつ<sup>1)</sup>。前者は一箇の經營内部に於いて異なる期間（Perioden）の數値を相互に比較することを意味し、後者はこれに對し、異なる經營の數値を同一期間或ひは異なる期間について相互に比較することを意味する。但し後者に於いて異なる期間の數値を比較するのは特別の場合で、一般に問題となるのは同一期間に於ける數値の比較であると言ふ。何れにせよシュマーレンバツハに於ては、經營比較は、同一經營の比較と異なる經營間の比較と言ふ二箇の比較形態に分かたれる。更に氏によれば時間比較は二重の性質を有ち、即ちこゝでは第一にそれ／＼一期間に屬する費用及び給付（Aufwand und Leistung）が正しく算定されること、第二にかくして各期間の成果が適切に比較されること、が必要である<sup>2)</sup>。また經營比較に於いては、企業の構造を明かならしめることが最も重要な問題である<sup>3)</sup>。

このシュマーレンバツハの分類については、既に、Zeitvergleich, Betriebsvergleich なる用語が不適當であるとか、或ひはこゝに氏の意味せしめてゐる内容が廣狹に過ぎると云ふことなどが批判されてゐる<sup>4)</sup>。たしかにかゝる批判もなされるだらうが、問題はむしろシュマーレンバツハの分類の仕方或ひは各個の分類に與へられてゐる内容にあるのではないかと思ふ。即ち氏は經營比較を二種に分ち、その内容を前記の如く説明してゐるのであ

5) Vgl. Lehrer, K., Bilanzvergleich, 1935, SS. 77-86.  
 6) 我が國に於けるこの問題に關する紹介或ひは我が國の論者の見解については次の著書を参照、古川榮一、經營比較論、第二章。黒澤清、工業經營比較、第二篇第三章。  
 1) Schmalenbach, E., Dynamische Bilanz, 4. Aufl., 1926, L. Der Betriebsver-

るが、この場合分類の仕方に問題はないであらうか。また各個の比較形態に於ける問題として、時間比較では費用及び給付の正確なる算定と成果の適切なる比較、經營比較では構造の比較、と云ふことがそれ／＼あげられてゐるのであるが、このやうな問題の設定の仕方は妥當であるかどうか。

こゝではシュマーレンバッハが經營比較の問題として論じてゐる内容のうち、私の言ふ比較形態の問題に限つて見るこゝとするが、一般に企業（經營數値或ひは經營計算値）を比較する場合、同一企業の比較と異なる企業相互の比較とに分かち得ることは同氏の説の通りである。たゞシュマーレンバッハに於いては、この二つの分類が單に經驗的或ひは形式的に行はれてゐるやうに思はれる。少くともこの點に關する充分な説明は與へられてゐない。成程一應説明されては居り、現に二箇の比較形態に於ける問題も規定されてゐるので、この限りこれら各個の形態の性質も一應明かである。しかし實は、問題は更にこゝにあるのではなからうか。即ちシュマーレンバッハは二箇の比較形態の内容を、比較される對象の領域或ひは部面の相違（即ち費用、給付、成果と構造）に従つてそれ／＼規定してゐるのであるが、この場合何故かゝる對象の區別がなされねばならないのか。少くとも基本的な比較の型について云へば、このやうな區別を行はねばならぬ理由はないであらう。従つて、シュマーレンバッハが二種の比較に各々前記のやうな内容を與へることは一應任意であるにしても、理論的にも實際的にも、さうなければならぬ性質のものではない。比較の對象は、何れの領域或ひは部面について見るも、一般的には同一企業に於いても異なる企業相互間に於いても、比較することが可能であり、また必要である。

要するにシュマーレンバッハに於いては、分類の根據が必ずしも明確でなく、また各個の分類に與へられた性

gleich, S. 333 ff.

なほ同氏は比較の對象とされるものを Betrieb と云ひ、或ひは Unternehmung と言つてゐる。

- 2) Schmalenbach, a. a. O. S. 333.
- 3) Schmalenbach, a. a. O. S. 335.

質に問題を残してゐると言ひうるだらう。これらの點を正しく規定することこそ分類上重要な問題である。

しかし、シュマールレンバツハの前記の二分類は、その結果だけを形式的に見れば正にその通りで正しい。この場合、比較の基準となるものは、一般的には、先づ同一企業に於いて時を異にして存在するか、或ひは企業を異にして存在するかの二つだからである。私は直接分析の對象たる企業の一特定時に於ける一定の經營事象(經營數値)の一團を一體と見(即ちその内容をなす各要素の性質は暫く問はない)、こゝから出發して右の基準の下に先づ二箇の第一次的・基本的な比較形態を分かつた。即ち同一經營比較と相互經營比較の二形態がそれである。<sup>5)</sup>この限り單に形式的にはシュマールレンバツハの分類と異ならない。しかし更に企業を具體的に比較する場合にはかゝる基本的な比較形態の分類だけでは不充分で、なほ下位(第二次的、第三次的等)の分類を必要とする。また右の外特殊な比較形態も考へられる。これらの點については、先きの小論<sup>4)</sup>で述べた所であるからこゝには繰返さない。

### 三

比較形態に關しシュマールレンバツハがこれを二種に分類したのに對し、更に三種に分類することが一つの主要な傾向をなしてゐる。それは、(一)一個の企業の時間的な變化の比較、(二)多數企業相互の一特定時における比較、(三)多數企業相互の時間的な變化の比較、といふ三種の形態に分かつ仕方である。たゞ同じ三分類を採るにしてもその分かつ方は必ずしも等しくはない。

右の如き三分類をなす一つの型は、靜態比較、動態比較の外にいま一つ第三の形態を加へ、これらによつて比較形態を分かつ仕方である。こゝに少し説明を要するのはこの靜態、動態の意味である。この兩者の概念は、經

4) 例へば、Hauck, W., Chr., Der Betriebsvergleich, S. 66, 古川榮一、經營比較論、7-11頁參照。

5) 6) 前掲拙稿。

營分析論或ひは經營比較論等に於いても屢々用ひられるが、その内容は必ずしも一樣ではない。大體それは二様に解されてゐる。その一つは經營(經營經濟)事象が靜的たるか動的たるかの性質によるもので、即ち靜的部面に於ける事象(靜態或ひは狀態等と言ふ)と動的部面に於ける事象(動態或ひは發展・變動等と言ふ)とを區別し、前者の比較を靜態比較(或ひは靜態分析)、後者の比較を動態比較(或ひは動態分析)と言ふ<sup>1)</sup>。他の一つは經營事象についてかゝる區別を行はず、單に一箇の時點或ひは期間に於ける事象を同時的に比較する場合を靜態比較と言ひ、これらの事象の時間的な變化を比較する場合を動態比較と言ふ<sup>2)</sup>。しかし經營分析或ひは經營比較の目的からすれば、靜的、動的兩部面の關係を綜合的に觀察してこれを他の同種の關係と比較せんとするのであるから、前の場合のやうに二つの部面から區別する方法は、いまは暫く措いて考へてよい。少くともこれは比較形態を分かち基本的な分類とはならない。而して當面の問題からすれば、後の場合に於けるが如き分類が取上げらるべきであらう。然しこの場合に於いても既に指摘したやうに、比較形態の分類として靜態比較、動態比較の外に更にいま一つ第三の比較があげられて居り、こゝではかゝる三分類が如何なる仕方になされてゐるか問題である。

かゝる三分類を採る論者の一人としてワイクマン<sup>3)</sup>があげられる。ワイクマンは、經營比較の目的を企業經營を批判し統制するといふことに求めて居り、比較形態に關しては、これを企業の比較可能性といふ觀點から問題をとらあげて先づ企業の比較可能性の方向は二つありとし、次いで更にこれを三つに分かつ。二つの可能性の方向とは、一時點に於ける状態(Zustand)と一定期間に異時點間に於ける發展(Entwicklung)とであり、而してこれらに應じてそれ／＼先づ状態比較と發展比較との二分類が行はれる<sup>4)</sup>。こゝに状態とは一時點の示す事象を指してゐる

1) Vgl. Schmalz, K., Betriebsanalyse, 1929, SS. 9-10. S. 51 ff. S. 185 ff. Hauck, W., Chr., Der Betriebsvergleich, 1933, S. 246, S. 262.

2) この見解は次に述べる Weigmann, Lehrer について見る如し。

3) Weigmann, W., Grundlagen des Betriebsvergleich, 1932.

4) Weigmann, a. a. O. S. 16 und 19.

ので、状態比較では當然かゝる事象が異なる企業間に於いて比較されることになる。問題は發展比較に於ける發展の意味であるが、ワイクマンに依れば異なる時点に於ける状態の比較により發展が明かにされると言ふ。而してこゝに求めんとするのは異なる時点における状態の差異・傾向である。然しまた状態を比較するといふためからか、同氏は『それ故嚴密に言へば發展比較なるものは何ら存在しない。』<sup>5)</sup>とも言つてゐる。

しかし實はワイクマンが Zustand と云ふ場合、その概念の規定は必ずしも一貫してゐないやうである。即ちそれは單に時點的な事象のみでなく、一特定時の經營事象全體を意味してゐると考へられる。それ故ワイクマンでは、經營事象の時間的變化の比較が發展比較と解されてゐると言へるであらう。而してこの發展比較は同一企業で行はれる場合と異なる企業間で行はれる場合との二種に分かたれる。ワイクマンはこのうち前者を動態比較 (Dynamischer Vergleich)、後者を連續比較 (Stationärer Vergleich) と呼び、更にこれらに對し、同一時点に於ける企業相互間の比較を (Statistischer Vergleich) 靜態比較と名づけてゐる。<sup>6)</sup>これがワイクマンの言ふ比較の可能性から見た三分類である。

このワイクマンの分類は、これも單に結果を形式的に見れば氏が問題としてゐる限り異論はない。たゞしかし氏に於いては、分類の基準は、先づ異なる特定時に於ける事象相互の比較か、同一特定時に於ける事象相互の比較かと言ふ點に求められ、こゝから比較される對象の關係せしめ方が問題にされてゐると解される。即ち換言すれば、異なる特定時の事象の差異・傾向即ち發展、同一特定時の事象即ち状態、といふことを基礎にして、前者では同一企業の時間的比較及び異なる企業間の時間的比較と云ふ二形態、後者では異なる企業間の比較といふ一形態、か

この場合一時點或ひは一定期間とは、正確には一特定時或ひは二箇乃至多數の特定時と言ふべきであるが、こゝでは Weigmann の言ふ所に従つておく。以下同斷。

5) Weigmann, a. a. O. S. 19.

6) Weigmann, a. a. O. SS. 19-23.



くして前記の三形態の分類がなされてゐる。それ故この場合には、發展、状態と云ふ二箇の『比較可能性』の前提の下に、比較される對象が相互に關係せしめられてゐることに特質があると言へるであらう。而して單に分類すると言ふことから言へば、かゝる分類の仕方は勿論可能である。

しかし、經營比較の型の問題としては、このやうな問題の取扱ひ方の當否はなほ吟味を要するであらう。かゝる方法で以つて問題がよく統一的に捉へられ、また比較を具體的に行ふ場合充分實際的效果を求めうるであらうか。既に述べた如く、經營分析或ひは經營比較に於いては、一定の企業の一特定時に於ける經營事象或ひはその關係の相對的地位を明かにすることに問題の重點があり、こゝに比較の基準を何に求めるかの問題が生ずる。私にはかゝる觀點から先づ先ぎにあげた基本的な二箇の比較形態を分類したのであるが、かくすることによつて問題をより組織的・統一的に捉へうるのではないかと思ふ。更にまたワイクマンの分類を採るにしても、かゝる基本的な分類だけではなほ充分でないこと、シュマーレンバッツハの場合に指摘したと同じことが言へるだらう。ワイクマンも基本的な分類につゞく下位の分類について個別的にはふれてゐないわけではないが、しかしこれを組織的に問題にする迄に至つてゐない。

レーラーも經營比較の形態について、ワイクマンの三分類とほゞ同様な分類を行つてゐる。<sup>7)</sup>レーラーはこれを貸借對照表比較の問題として論じてゐるのであるが、<sup>8)</sup>氏の場合には(一)期間比較(Periodenvergleich)(二)經營比較(Betriebsvergleich)、(三)趨勢比較(Tendenzenvergleich)の三箇の比較に分かたれてゐる。(一)は一定期間に於ける一個の企業の貸借對照表の比較、(二)は一定時點に於ける多數企業の貸借對照表の比較、(三)は一定期間に於ける多數企業の

7) Lehrer, K., Bilanzvergleich, 1935, SS. 74-86.  
 拙稿、貸借對照表分析論に關する若干の問題、經濟論叢第46卷第3號(昭和13年3月)参照。

8) Lehrer は Bilanzvergleich を Betriebsvergleich の Spezialtyp と規定してゐる。(Lehrer, a. a. O. S. 76.)

貸借対照表の比較、をそれ〴〵意味する。<sup>9)</sup>更に他方レージャーはこれら三種の比較形態の性質を靜態、動態と云ふ觀點からも問題にし、右の三分類のうち、經營比較を靜態比較、期間比較と趨勢比較を動態比較と規定してゐる。これらは名稱こそワイクマンの分類と異なるが、内容的には兩者の分類は大體同一に歸するものと見ることが出来る。<sup>10)</sup>

たゞレージャーのワイクマンと異なる重要な點の一つは、ワイクマンは最初に二箇の比較の可能性を示し、それを更に三箇に分類してゐるに對し、レージャーは最初から三箇の分類を平列的に行つてゐることである。而してこの分類は、時點と期間(異時點間)、企業の数が一箇か多數か、といふこれらの要素の相互の組み合わせによつてなされてゐる。

レージャーの場合にも三箇の分類を單にそれだけとして見れば別に問題はない。しかし氏に於いて問題とされるべき點は、これらの分類が斷りもなく平列的に行はれ、而かもそれが右の如く形式的になされてゐることである。レージャーは各個の形態についてそれ〴〵の有つ實際的意義を説明してゐるが、かゝる説明は分類の論據を充分示してゐるものとは言へない。従つて如何なる論據からレージャーが前記の如き分類を行つたのかは必ずしも明白でない。この點に重要な問題が残されてゐると言はねばならないだらう。

#### 四

經營分析或ひは經營比較に於いて更によく問題とされる分類として、内的經營比較(内的經營分析)、外的經營比較(外的經營分析)なる分類がある。經營比較論者ではシュネットラーがこの分類に重きを置いて居り、氏はこれを

9) Lehrer, a. a. O. S. 76.

こゝに貸借対照表とは廣義のもので本來の貸借対照表、損益計算表營業報告書等を含む。Lehrerはこれらの貸借対照表、損益計算表に表はされてゐる事象を何れも時點的なものとして居り、従つてまた一定期間とは異なる時點間のことである。

經營比較の種類の問題として取扱つて居る。實際にはシュネットラーの言ふ内的、外的の區別は、比較形態の問題とは性質を異にするけれども、氏の取扱つてゐる所はこの問題と關聯してゐるので、こゝに併せ論ずることも無意義ではないであらう。

この内的經營比較、外的經營比較の區別は、一般にはむしろ比較形態の分類として採られてゐる。即ちこの場合には、前者に於いて同一企業の時間的な比較、後者に於いて異なる企業相互の比較、がそれぞれ意味せしめられてゐる。<sup>3)</sup>しかしこの種の分類については、各個の形態の名稱は異つてゐるが、既に比較形態の問題として述べた所であるから、こゝでは更めて問題にしない。

比較形態については、シュネットラーも一應先づ同一企業の比較即ち同一經營時間比較 (Einbetrieblicher Zeitvergleich) と多數企業の比較即ち相互經營比較 (Zwischenbetrieblicher Vergleich) との二種に分かつ。<sup>3)</sup>しかしシュネットラーに於いては、經營比較上最も重要な基本的分類は内的經營比較 (Interner Betriebsvergleich) と外的經營比較 (Ex-  
terner Betriebsvergleich) とに分かつことである。こゝに内的、外的と言ふのは、比較材料の範圍とその統制の能否による區別であり、従つてまた同時に分析者による區別である。<sup>4)</sup>即ち分析者が企業の内部に在つて比較材料を自由に調査・蒐集し且つ吟味しうるか、或ひは分析者が外部に在つてかゝる便宜を有たないかと言ふことによつて、内的、外的の區別がなされてゐる。自ら後者に於いて用ひられる材料は、一般に公表されたもの乃至問合せによつて得られたもの等である。

右の同一經營時間比較と相互經營比較とは、後者に重要な意義がおかれ特にこれが説明されてゐる。即ちこ

10) 但し嚴密には兩者の考へ方は必ずしも一致しない。  
1) Schnettler, A., Der Betriebsvergleich, 1933, SS. 7-11.  
2) Vgl. Wall and Duning, Ratio Analysis of Financial Statements, 1928, pp. 168-171. Weigmann, a. a. O. S. 22.  
3) Schnettler, a. a. O. SS. 3-4. なほ同氏は Betrieb なる語を以つて Unterneh-

の相互經營比較はシュネットラーの強調する内的、外的を基準に分類され、更にこのうち内的相互經營比較は二種に、外的相互經營比較は三種にそれ／＼區別される。これら五つの分類は何れも比較形態に該當するものであるが、即ちそれは、前者では『(一)二箇或ひは多數の經營の個別的數値の相互比較、(二)一箇の經營の個別的數値と當該經營所屬部門に於ける平均値との比較』の二形態に分かたれ、また後者では『(一)一産業部門に於ける多數或ひは全部の數値の比較、(二)一箇の經營の數値と(多數の經營より得られた同種の)平均値との比較、(三)假定的前提を基礎とせる數値の比較』の三形態に分かたれる。<sup>6)</sup>

シュネットラーは右の如く内的、外的と言ふ分類を重要視し、この分類の下に私の言ふ比較形態の問題を取扱つてゐるのであるが、比較形態との關係に於いて見るとき、かゝる内的、外的と言ふ分類は如何なる意義を有つてあらうか。このやうな分類は成程可能である。また從來から既に經營分析論に於いても、分析者が企業の内面に在る者かそれとも外部に在るものかと言ふことによつて、内的分析、外的分析と言ふ如き分類がなされてゐる。<sup>8)</sup>そしてこれらの分類は、問題によつてはまた一定の意義を有つ。

しかしシュネットラーに於いて問題なのは、内的、外的の分類を比較形態の分類と關係せしめてゐる點であるが、企業を比較する型の問題から言へば、内的、外的と言ふやうな區別は必要でない。企業の内部に居る者であらうと外部に居る者であらうと、經營事象或ひはその關係を比較する仕方には、一般的には異なる筈がないからである。もつともシュネットラーは、かゝる内的、外的の分類が比較形態を分かち基本的なものであると言つてゐるのではないが、しかし既に示したやうに、この分類の下に更に比較形態に當るものを分かちてゐるのである。

nung, Werk, Betriebsteil, Arbeitsplatz 等を凡て包含して意味せしめてゐる。従つて私がこゝに企業と云ふ場合にはまた右の各種のものを含むことになる。

4) Schinettler, a. a. O. S. 8.  
5) 括弧内岡部挿入。

問題は比較形態の分類をかゝる方向に於いて行つてゐる點にあるだらう。従つてまた比較形態の分類自体も非組織的なものになつてゐる。これらの點についてはなほ問題もあるが、たゞこゝでは比較形態の問題に關する限り、シュネツトラの言ふが如き内的、外的の區別は何ら意義を有つものでなく、むしろ問題を混亂させるに過ぎないことを指摘するに止める。

## 五

ハウクの『經營比較論』<sup>1)</sup>は、この小論で取扱つた論者の著作のうち最も新しい方に屬し、その理論的業績は一部の人には可なり高く評價されてゐる。しかし他の點は暫く別とし、比較方法、特に比較形態に關する氏の見解にはどれほどの意義を認めうるであらうか。

ハウクは經營比較論に於ける三箇の方法論的基本問題として、先づ比較目的、比較對象、比較方法(比較手續)の三問題をあげてゐる。こゝに言ふ比較目的とは何のために比較を行ふかと言ふ觀點から比較の可能性を分かつ基準にして、これを基礎に經營比較は先づ記述的比較と因果的比較との二種類に分かたれる。比較對象の問題では、比較對象たる企業及び經營を更に比較範圍なるものを基準にして種々の比較領域に分類することが内容をなす。更に比較方法の問題では、右の二つの基本的問題を前提として、比較を行ふ場合の實際的な方法(Carsächlichies Vorgehen)と云ふ觀點から比較方法の分類を行ふ。

いまこゝに直接問題となるのは、この第三の比較方法に於ける一部の問題である。しかし差當り先づ問題なのはハウクの言ふ比較方法(Vergleichsverfahren)なるものゝ概念である。これが重要なるにも拘らず、實は必ずしも

6) この比較は例へば通常最善の立地を調査する場合などに行はれる。

7) Schnettler, a. a. O. SS. 8-11.

8) Vgl. le Coutre, W., Praxis der Bilanzkritik, Bd. I, S. 71., Schmalz, K., Betriebsanalyse, S. 7.

1) Hauck, W. Chr., Der Betriebsvergleich, Bd. I, 1933.

充分明瞭でない。

ハウクが Vergleichsverfahren の問題としてゐることは、比較形態及び比較の數理的手續の問題であると言ひ得るが、然しこゝで比較形態は必ずしも纏つた形では取扱はれてゐない。と云ふのはハウクは前記の三箇の基本的問題に入るに先き立ち經營比較の概念を述べてゐるのであるが、こゝで經營比較の『概念及び内容』を對象と方法との二方向から考察し、方法論の上からは經營比較には二箇の主要な型があるとしてその一つを同企業の比較即ち自己比較 (Selbstvergleich)、<sup>2)</sup> 他を異なる企業間の比較即ち相互比較 (Zwischenvergleich) として分類してゐる。<sup>3)</sup> 即ちかかる比較形態は直接 Vergleichsverfahren の問題とはされてゐないと解される。また對象については企業と經營とを分かつ立場から、企業比較と經營比較とに分類する。従つて自己比較とは同一經營及び企業の比較であり、相互比較とは經營相互及び企業相互の比較である。このハウクの分類は、名稱は異なるが内容的には、大體それ／＼シュマーレンバツハの時間比較と經營比較に該當する。<sup>4)</sup>

ハウクは氏の言ふ方法論の上から先づ右の如く自己比較と相互比較との二箇の型を分かつのであるが、然しこれが Vergleichsverfahren と如何なる關係にあるかはこれまた必ずしも明かでない。たゞ次に述べるやうな Vergleichsverfahren の各個の種類に於いて何れも自己比較及び相互比較が行はれることを述べ、或ひはこれら二つの比較形態に分つて論じてゐるに止ると言へるだらう。

それでは Vergleichsverfahren の問題に於いて取扱はれてゐる比較方法の種類(形態)、その各個の性質は如何なるものであるか。實は此の場合にも私の言ふ比較形態のみが問題とされてゐるわけではなく、むしろ比較方法の分

2) Hauck, a. a. O. SS. 103-104.  
3) Hauck, a. a. O. SS. 63-72.  
4) Hauck, a. a. O. S. 68.

類は、基本的には數理的な方法の區別からなされてゐる。しかしこれらの分類は直接また比較形態の問題に關聯してゐる。何れにしてもこゝでハウクの比較方法の分類が問題となる。氏は各種の基準から分類し、その分類がまた相互に組み合はされて一見甚だ複雑な形を呈してゐるが、主要な分類はほど次のやうなものであり、こゝにハウクの問題の取扱ひ方もほど窺はれるだらう。

A 素數比較 (Normalvergleich) — (一) 素數・靜態比較 (Normalstatischer Vergleich) (二) 素數・對照的連續比較 (Normal-kinetischer Vergleich) (三) 素數・動態比較 (Normaldynamischer Vergleich) この素數比較では特に自己比較、相互比較の分類はなされてゐないが、何れの比較も行ひうる事が述べられてゐる。

B 比較數比較 (Komparativer Vergleich) この比較では特に先づ自己比較と相互比較とを分かつ。即ち(一) 比較數・自己比較 (Komparativer Selbstvergleich) (二) 比較數・相互比較 (Komparativer Zwischenvergleich)。更にこの各々を一方では記述的比較と因果的比較とに分ち、他方では比較方法による分類としてそれ々々次の三つに分ち。(a) 比較數・靜態比較、(b) 比較數・對照的連續比較、(c) 比較數・動態比較。

C 相關比較 (Korrelationsvergleich) — (一) 經營内相關比較、(二) 經營間相關比較。この各々を更に次の二つに分ち。(a) 素數・相關比較、(b) 比較數・相關比較。

これがハウクの比較方法 (Vergleichsverfahren) に於ける分類の概要である。その内容について以下ハウクに従つて説明を加へ、且つ私の疑問とする所、問題點等を述べようと思ふ。

ハウクは比較方法を先づ第一に Normalvergleich, Komparativer Vergleich, Korrelationsvergleich の三つに分類し、これらを更に他の基準からそれ々々細分する方法をとつてゐる。然し先づこの三つの分類であるが、如何なる根據からかゝる分類がなされたのかは必ずしも明白でない。また分類の基準についてもその性質は充分明かに

5) Hauck の分類はこゝに掲げたものより更に詳細なものであるが (Hauck, a. a. O. SS. 382-383.) こゝには大要のみを示す。  
6) この譯語は、Hauck の Normalvergleich なるものは後に見る如く素數の比較を意味してゐるのでそれに従つたのであるが、氏がこの比較で取扱つてゐる内容からすれば絶対數比較と云つた方が適當かも知れない。

されて居ず、たゞ各個の比較についてそれ／＼の特質を個別的に説明すると言ふ仕方によつてゐる。

ハウクによれば、Normalvergleich とは素數 (Einfache Grössen, Ziffern oder Zahlen) を比較する場合の比較である。即ち『Normalvergleich の本質は、豫め如何なる方法 (換算其他により) によつても變化されてゐない素數を比較することにある。』<sup>7)</sup>従つて『如何なる場合にも關係 (Relationen) を表はさない』<sup>8)</sup>數値が比較される。かゝる例としては、廣告數と賣上數との比較、機械の價値と建物の價値との比較、勞働者數と他の雇傭者との比較、等々といふやうな比較の仕方があげられてゐる。これから見るとこの場合の素數とは、何ら加工されない經營數値、絶對數を意味してゐるものと解され、Normalvergleich はかゝる數値を組み合はせて比較することゝ考へられる。次に Komparativer Vergleich については、その本質は『比較數 (Vergleichsziffer) そのものが一度比較されることにある。』<sup>9)</sup>と規定されてゐる。或ひはまた言ふ『Komparativ vergleichen とは比較數を比較することである。』<sup>10)</sup>と。こゝで比較數とは何を指すかと言へば、これにも特に明確な規定は與へられてゐないけれども、ハウクが比較數比較における最も重要な數値としてあげてゐるのは、相對數 (Verhältniszahlen)、平均値 (Mittelwerte)、分散の測定 (Streuungsmaassen) 等である。<sup>11)</sup>これによつてハウクが意圖してゐる所は一應明かであらう。更に第三の Korrelationsvergleich については『相關比較とは所謂相關 (Korrelation) を對象とする比較である。』<sup>12)</sup>と言つてゐる。

これら三箇の分類に次いで、ハウクに於ける第二段の分類<sup>13)</sup>と見られるのは、自己比較 || 經營内比較と相互比較 || 經營間比較とによる分類である。前記の三箇の分類がそれ／＼何れも更にかゝる基準から分類されてゐるのである。然しこれらは單に形式的に組み合はされてゐるに過ぎない。

7) 8) Hauck, a. a. O. S. 245. 但し Hauck が素數としてゐるものは、數學上で云ふ素數とは一致しない。このことは以下の例示からも察せられる。  
9) 10) Hauck, a. a. O. S. 267.  
11) Hauck, a. a. O. SS. 287-288.  
12) Hauck, a. a. O. S. 343.



更に問題にされてゐる分類は既に示した所から見られる通り、靜態比較、對照的連續比較(Kinetischer Vergleich)、動態比較の三者である。<sup>14)</sup>こゝに靜態比較とは、靜止してゐる状態(Stand)の同時點或ひは異時點間に於ける比較を意味し、またこの状態とは變動(Bewegung)に對する概念として用ひられてゐる。對照的連續比較とは、二箇の比較對象に於ける状態を相互に時間的に對比して連續的に比較することを意味する。ハウクは、こゝに比較されるのは變動でなくその過程の個々の段階に於ける靜止せる状態であるとし、従つて、普通この比較は變動の比較と誤られ易いが實はさうでないと言ふ。<sup>15)</sup>またこの場合ハウクは、比較される二箇の對象に於ける時の關係は同一たるを要しないとし、寧ろこの時の關係が異なる場合を例示してゐる。第三の動態比較は靜態比較に對立するもので、後者が靜止せる状態の比較であるに對し、前者は變動(Bewegung)の比較と規定されてゐる。

ハウクにおける比較方法の分類の要點は大體以上の如くであり、他の論者に較べて問題の取扱ひ方がかなり異つてゐる。しかしこの異つてゐると云ふことは、別にヨリ積極的な意義を有つてゐることにはならない。私は第一に、比較方法の問題、特にそこに於ける比較方法なるものゝ分類が何故ハウクの如き仕方になされねばならぬかと言ふことが問題だらうと思ふ。成程、個別的・部分的には一應述べられてゐるが、組織的には殆んど明かにされてゐないと言つても過言ではないだらう。種々の觀點から形式的な分類を行ひ、これらを單に相互に組合せてゐるやうに見える。例へば先づ最初に三箇の分類がなされ、以下種々の分類が行はれてゐるのであるが、何故最初にこの三箇の分類がなされねばならないのか。根據があるとすればそれは何處に求められてゐるのか。また以下の分類における相互の關係せしめ方は妥當かどうか。これらの點について遺憾ながらハウクから充分な説

13) 但し Normalvergleich に於いては、次に述べる靜態比較、對照的連續比較、動態比較の三者が第二段の分類として採られてゐる。(Hauck, a. a. O. S. 382.)

14) この靜態比較、動態比較の分類は、名稱の上では Weigmann, Lehrer のこれらの分類と同様であるが、その内容から云へばそれぞれ意味するところは異なる。

明は聞かれない。かう見るのは私の理解の不充分さの然らしむる所であらうか。更に各個の分類についても吟味さるべき點が種々存在するが、こゝでは省略する。

要するに比較形態の觀點から見たハウクの分類は、一見詳細に互つてゐるやうに見えるが、その實組織的に行はれてゐるとは云ひ難く、むしろ種々批判の餘地を残してゐる。分類はこれを如何に行ふも可能であらうが、要は經營分析或ひは經營比較の目的から出發してこれを充分充たしうるやうなものでなければならぬであらう。

## 六

經營比較論者の比較形態に關する見解はほとゞ以上の如くである。私はこゝに從來の所説を概観すると共に、問題點と考へられる主要な點をそれゞ指摘した<sup>1)</sup>。然し私の考へる所もなほ不充分であり、或ひはこゝにあげた論者の見解について誤り解してゐる點がないかを惧れる。また從來の研究に種々の問題が残されてゐるにしても、勿論私はこゝに取上げた論者の見解の凡てを否定せんとするのではない。それらは經營比較論の發展の上に一定の意義を有つてゐる。

然しまた既に見た如く、この比較形態に關する問題が、從來理論的或ひは實際的に充分展開されてゐないことも事實である。殊に注意さるべき點は、比較形態の問題は、經營分析論或ひは經營比較論に於いて、更にまたかかる研究に於ける比較方法の問題として、如何なる意義を有つかと云ふことが、一般に充分にされてゐないのではないかと言ふことである。この場合比較形態の問題は、單に比較形態の問題としてゞなく、これを右の如き問題との全體的な關係に於いて見る必要がある。かくすることに依つて、更に問題のヨリ合理的な解決の方向が見出されるであらう。

15) Hauck, a. a. O. S. 259 ff.

1) 各論者の見解については、比較形態の問題の觀點からそれぞれ最も主要な點と考へられるものゝみを指摘し、其の他細部に互る點については省略した。